

平成20年の病害虫の発生状況

1 病害虫の発生経過概要及び発生原因解析

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
早期水稻	葉いもち	遅	並	・7月1半旬に発生を認め、平年並の発生であったが、一部地域で多発圃場があった。	・6月中旬～7月上旬の寡照	・トリシクラゾール剤、プロベナゾール剤等の箱施用による防除
	穂いもち	遅	並	・8月5半旬に発生を認め、平年並の発生であった。		・出穂期頃のフェリムゾン・フサライド剤、カスガマイシン・フサライド剤等による本田防除
	縞葉枯病	やや遅	多	・6月6半旬に発生を認め、その後、7月上旬にかけ増加し多発生となった。	・6月5日の飛来 ・本田におけるヒメトビウカの発生が多かった。	
	ヒメトビウカ	やや早	多	・本田では5月6半旬に発生を認め、その後多い発生で推移した。特に6月下旬は巡回調査において株当たり虫数9.2頭と非常に多い発生であった。	・越冬世代の生息量が非常に多かった ・6月5日の飛来	・イミダクロプリド剤等の箱施用による防除 ・エトフェンブロックス剤、シラフルオフェン剤等による本田防除
	萎縮病	—	—	・発生を認めることができなかった。	・ツマグロヨコバイの保毒率が低かった。	
	ツマグロヨコバイ	並	並	・本田では5月2半旬に発生を認め、平年より少ない発生であったが、7月下旬以降平年並の発生で		・エトフェンブロックス剤、シラフルオフェン剤等による本田防除
	紋枯病	遅	やや少	・7月3半旬に発生を認め、平年よりやや少ない発生で推移した。		・バリダマイシン剤、フルトラニル剤、ジクロシメジン剤、ペンシクロン剤による本田防除
	セジロウンカ	遅	少	・5月6半旬に飛来を初確認した。・本田では5月6半旬に発生を認め、少ない発生であったが、6月下旬は平年並であった。その後7月以降は少ない発生で推移した。	・飛来量が少なかった。	・BPMC剤、エトフェンブロックス剤、シラフルオフェン剤等による本田防除
	トビロウンカ	遅	やや少	・6月5半旬に飛来を初確認した。・本田では、7月2半旬に発生を認め、やや少ない発生で推移した。	・飛来量が少なかった。	・BPMC剤、エトフェンブロックス剤、シラフルオフェン剤等による本田防除
	コブノメイガ	遅	やや少	・6月3半旬に初誘殺を確認し、主要な飛来は6月6半旬であった。・本田での食害株率は低かった。	・飛来量が少なかった。	・カルタップ剤、メトキシフェノジド剤等による本田防除
	イネミズゾウムシ	並	やや少	・5月2半旬発生が認められ、やや少ない発生で推移した。	・越冬量が少なかったと考えられる。	・ベンフラカルブ剤、イミダクロプリド剤の箱施用による防除 ・多発圃場ではシクロプロトリン剤による本田防除
	斑点米カメムシ類	並	やや多	・雑草地における調査では、6月以降7月まで平年並の発生で推移した。・本田では、7月上旬以降発生が増加し、やや多い発生であった。		・圃場周辺の雑草除去 ・出穂期以降のエトフェンブロックス剤、シラフルオフェン剤、MPP剤等による防除
普通期水稻	葉いもち	遅	やや多	・7月2半旬に発生を認め、平年並の発生であったが8月上旬以降増加し、やや多い発生で推移した。一部多発圃場も認められた。	・窒素過多 ・6月下旬～7月1半旬の日照不足、多雨	・トリシクラゾール剤、プロベナゾール剤等の箱施用による防除
	穂いもち	並	やや多	・9月2半旬に発生を認め、やや多い発生であった。	・一部で葉いもちの発生が多かった。 ・8月中下旬の日照不足、多雨	・出穂期頃のフェリムゾン・フサライド剤、カスガマイシン・フサライド剤、アゾキシストロビン剤等による本田防除
	縞葉枯病	並	多	・6月6半旬に発生を認め、多発生で推移した。また5月下旬田植えで激発圃場がみられた。 ・6月5日、ネットトラップにおいて多数捕獲された。	・第1世代虫の生息量が多かった。 ・6月5日の飛来 ・本田におけるヒメトビウカの発生が多かった。	
	ヒメトビウカ	並	多	・5月の雑草地及び小麦圃場では多い発生であった。 ・本田では7月上旬以降多く推移した。		・イミダクロプリド剤、フィプロニル剤等の箱施用による防除 ・BPMC剤、エトフェンブロックス剤、シラフルオフェン剤等による本田防除
	萎縮病	—	—	・発生を認めなかった。	・ツマグロヨコバイの保毒率が低かった。	
	ツマグロヨコバイ	並	やや少	・期間を通してやや少ない発生であった。	・トビロウンカとの同時防除	・イミダクロプリド剤、フィプロニル剤等の箱施用による防除 ・BPMC剤、エトフェンブロックス剤、シラフルオフェン剤等による本田防除

農作物名	病虫害名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
普通期水稻	紋枯病	並	やや多	・7月5半旬に発生を認め、8月以降やや多い発生で推移した。一部圃場で上位葉鞘への進展がみられた。	・7月中旬～8月上旬の高温 ・茎数が多かった。	・チフルザミド剤の箱施用による防除 ・フルトラニル剤、ペンシクロン剤、バリダシン剤、アゾキシストロビン剤等による本田防除
	セジロウンカ	遅	少	・5月6半旬に飛来を初確認した。 ・本田では6月2半旬から発生がみられ、少ない発生で推移した。	・飛来量が少なかった。	・イミダクロプリド剤、フィプロニル剤等の箱施用による防除 ・BPMC剤、ブプロフェジン剤、エトフェンプロックス剤、シラフルオフェン剤等による本田防除
	トビイロウンカ	遅	少	・6月6半旬に飛来を初確認した。 ・本田では7月2半旬から発生がみられ、少ない発生で推移した。 ・坪枯れの発生は9月中旬から見られたが、発生は少なかった。	・飛来量が少なかった。	・イミダクロプリド剤、フィプロニル剤等の箱施用による防除 ・BPMC剤、ブプロフェジン剤、エトフェンプロックス剤、シラフルオフェン剤、ジノテフラン剤等による本田防除
	コブノメイガ	遅	やや少	・6月3半旬に初誘殺を確認し、主要な飛来は6月6半旬であった。 ・本田では、窒素が効いた圃場では出穂以降食害株率が増加した。	・飛来量が少なかった。 ・窒素過多 ・8月上中旬の防除不徹底	・フィプロニル剤、スピノサド剤の箱施用による防除 ・テブフェノジド剤、カルタップ剤、メトキシフェノジド剤等による本田防除
	斑点米カメムシ	並	並	・雑草地における調査では6月以降8月上旬まで平年並の発生であった。 ・本田では9月上旬まで平年よりやや少ない発生であったが、9月下旬は並の発生であった。	・トビイロウンカとの防除が徹底された。	・圃場周辺の雑草除去 ・出穂期以降のエトフェンプロックス剤、シラフルオフェン剤、MPP剤、ジノテフラン剤等による防除
	スクミリンゴガイ	並	やや多	・やや多い発生で推移した。	・前年の発生がやや多く冬季の気温が高かった。 ・6月下旬の多雨	・IBP剤、カルタップ剤、ベンスルタップ剤、メタルデヒド剤等による本田防除 ・卵塊、貝の捕殺
麦	赤かび病	大麦:遅 小麦:遅 裸麦:遅	大麦:少 小麦:少 裸麦:少	・大麦、小麦では平年より遅く、5月2～3半旬に発生を認め、少ない発生であった。裸麦では発生を認めることができなかった。	出穂開花期の4月上旬は降雨量が多かったが、連続降雨はほとんどなかった。その後、5月上旬も降雨量は多かったが、連続降雨がほとんどなく、5月中下旬は降雨量が少なかった。	・開花盛期とその7～10日この薬剤散布(チオファネートメチル、プロピコナゾール、メトコナゾール)
	うどんこ病	大麦:- 小麦:遅 裸麦:-	大麦:少 小麦:やや少 裸麦:少	・大麦、裸麦では発生を認めることができなかった。小麦では平年並の、4月2半旬に発生を認め、やや少ない発生で推移した。		
	黒穂病	大麦:早 小麦:早 裸麦:並	大麦:多 小麦:やや多 裸麦:多	・大麦で4月2半旬、裸麦、小麦で4月6半旬に発生を認め、やや多～多の発生で推移した。	・前年の発生がやや多く、伝染源量が多かった。	・種子消毒
	斑葉病	大麦:- 裸麦:-	大麦:少 裸麦:少	・大麦、裸麦ともに発生を認めなかった。	・種子消毒により近年減少傾向にある。	・種子消毒
	アブラムシ類	大麦:やや遅 小麦:並 裸麦:やや遅	大麦:多 小麦:多 裸麦:多	・大麦で3月5半旬、裸麦で3月6半旬、小麦で3月2半旬に発生を認め、平年より多い発生で推移した。	・4月中旬、下旬の少雨	
大豆	べと病	並	やや多	・8月5半旬に発生を認め、その後増加し、平年よりやや多い発生であった。		
	葉焼病	やや遅	やや多	・9月3半旬に発生を認め、その後増加し、平年よりやや多い発生であった。		
	ハスモンヨトウ	並	やや多	・7月6半旬から発生を認め、並の発生であったが9月下旬以降増加した。また白変葉もみられ、9月下旬から増加した。	・8月上旬から9月下旬にかけての防除徹底。	・インドキサカルブ剤、エトフェンプロックス剤、ピリダリル剤、クロルフルアズロン剤による防除
	鱗翅目幼虫	並	並	・8月2半旬にウババ類の発生を認め、平年並の発生であった。		・ハスモンヨトウとの同時防除
	吸蜜性カメムシ	並	並	・9月2半旬に発生を認め、10月下旬にはミナミアオカメムシが一部の圃場で多発したが、全般的には並の発生であった。		・エトフェンプロックス剤、クロチアニジン剤による防除

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
じゃがいも	葉巻病	春作：並 秋作：並	春作：やや少 秋作：並	・春作：ほとんど発生を認めなかった。 ・秋作：ほとんど発生を認めなかった。		・種いもの更新 ・アブラムシの防除
	疫病	春作：遅 秋作：並	春作：少 秋作：やや多	・春作：初発生は6月上旬に確認し、少ない発生であった。 ・秋作：10月下旬から11月にかけて、一部で発生した。	・4月中旬～5月中旬の少雨 ・10月の高温、10月下旬～11月上旬の曇雨天	・マンゼブ、メタラキシル、TPN剤等による防除
	アブラムシ類	春作：並 秋作：やや早	春作：やや多 秋作：やや少	・春作：4月下旬から5月にかけて増加しやや多い発生であった。 ・秋作：生育中期以降少ない発生で推移した。	・4月中旬～5月中旬の少雨	・イタダフロリド、合成ピレスロイド系剤等による防除
	ニジウヤホシテントウ	春作：並 秋作：やや早	春作：やや少 秋作：やや多	・春作：ほとんど発生を認めなかった。 ・秋作：10月上旬まで一部で多い発生であった。		・アブラムシ類との同時防除
	食葉性ヤガ類 (ハスモンヨトウ、シロイチモジヨトウ、オオタバコガ)	春作：並 秋作：やや遅	春作：並 秋作：やや多	・春作：4月下旬から発生し、平年並の発生であった。 ・秋作：10月以降ヨウムシ類が増加し、やや多い発生であった。	・9～10月の高温	・有機リン系、ピリダリル剤による防除
冬春キュウリ (07年植付)	モザイク病	並	やや少	・ほとんど発生しなかった。		・アブラムシ類の防除
	斑点細菌病	並	やや多	・12月上旬から発生し、平年よりやや多い発生であった。		・銅剤による防除
	べと病	やや遅	並	・12月上旬から発生し、平年並の発生であった。		・湿度管理 ・マンゼブ、ホセチル、フェニルアミド系剤による防除
	褐斑病	並	多	・11月下旬から発生し、2月以降増加して多い発生であった。	・1月の高温。	・ジエトフェンカルブ・チオファネートメチル、ジエトフェンカルブ・プロシドン等による防除
	うどんこ病	並	多	・11月上旬から発生し、2月以降増加して多い発生であった。		・EBI、メトキサクリレート系、TPN、炭酸水素カリウム、MBCピリム剤等による防除
	灰色かび病	遅	並	・3月上旬から発生を確認し、平年並の発生であった。		・湿度管理 ・被害果の除去 ・ジエトフェンカルブ、プロシドン、MBCピリム、フルジオキシニル剤等による防除
	菌核病	並	やや少	・1月に発生を確認し、やや少ない発生であった。		・被害果の除去 ・灰色かび病との同時防除
	アブラムシ類	並	やや少	・11月下旬に一部で認めたが、ほとんど発生しなかった。		・定植時のネオニコチノイド系粒剤による防除 ・コナジラミ類、アザミラミ類との同時防除
	ミナミキイロアザミウマ	並	並	・11月下旬から発生し、平年並の発生であった。		・定植時のネオニコチノイド系粒剤による防除 ・エマクチン安息香酸塩、スピノサド、ネオニコチノイド系剤等による防除
	コナジラミ類	並	多	・11月上旬から1月までは多い状態が続き、2月以降やや多い発生であった。		・定植時のネオニコチノイド系粒剤による防除 ・ネオニコチノイド系、トルフェンビラド剤等による防除
冬春トマト (07年植付)	モザイク病	並	並	・ほとんど発生しなかった。		・土壌消毒 ・アブラムシ類の防除
	疫病	並	少	・一部で発生したが、少ない発生であった。		・シモキサル剤、フェニルアミド系・マンゼブ混合剤等による防除
	葉かび病	並	少	・3月上旬から認めたが、少ない発生であった。	・抵抗性品種の普及。	・トリフルソール、TPN剤等による防除
	灰色かび病	並	やや多	・2月から発生し、4月下旬にはやや多い発生となった。		・湿度管理 ・プロシドン、チオファネートメチル、ジエトフェンカルブ、フルジオキシニル剤による防除 ・バチルス・ズブチルス剤による防除
	アブラムシ類	並	並	・4～5月に一部で発生し、平年並の発生であった。		・コナジラミ類との同時防除
	マメハモグリバエ	やや遅	並	・栽培前期は少なめで推移したが、5月に増加し平年並の発生であった。		・エマクチン安息香酸塩、シロミジン、ネオニコチノイド系剤等による防除
	タバコガ類	並	やや少	・秋期に一部で発生したが、概ね平年並みの発生であった。	・防虫ネットの普及。	・エマクチン安息香酸塩、スピノサド、IGR剤等による防除
	コナジラミ類	やや早	並	・栽培前期から発生が多く、期間を通して平年よりやや多い発生であった。	・9～10月の高温	・防虫ネットの設置 ・定植時のネオニコチノイド系粒剤施用 ・ピリダベン、ネオニコチノイド系剤等による防除

農作物名	病虫害名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
タマネギ (07年植付)	白色疫病	並	並	・2月から一部で認められ、平年並の発生であった。		・TPN、マンゼブ、酸アミド系剤による防除
	べと病	やや遅	やや多	・4月に発生を認め、やや多い発生であった。		・TPN、マンゼブ、酸アミド系剤による防除
	ボトリチス属菌による葉枯症	遅	少	・ほとんど発生を認めなかった。		・フルジオキニル剤等による防除
	ネギアザミウマ	やや早	並	・11月から発生が目立ったが概ね平年並の発生であった。		・アセフェート剤等による防除
イチゴ(本圃) (07年植付)	炭疽病	並	やや多	・定植後、10月上旬から発生が見られ、12月上旬まで発生が続き、やや多い発生であった。	・9月～10月上旬の高温。 ・10月上旬の多雨 ・本病に対する感受性の高い品種の普及。	・無感染株の定植 ・発病株の除去
	萎黄病	並	多	・10月下旬から発生を確認し、4月まで発生が続いた。	・9月～10月上旬の高温	・無感染株の定植 ・発病株の除去 ・土壌消毒
	うどんこ病	並	やや少	・葉で11月上旬から発生を確認し、12月上旬にやや多に増加したが、12月下旬以降やや少ない発生であった。		・古葉、罹病葉の除去 ・被害果の除去 ・EBI、炭酸水素カリウム、ホリオキシ、メバコリウム剤等による防除
	灰色かび病	並	やや少	・12月上旬から発生し、1月下旬に平年並に増加したが2月以降やや少ない発生であった。		・湿度管理 ・被害果の除去 ・イプロジオン、ビンロソリン、プロシドン、メバコリウム、メチシアクリレート系剤等による防除
	アブラムシ類	並	やや多	・9月下旬から発生し、10月下旬から11月にかけて増加、やや多い発生であった。	・9月～10月上旬の高温	・フルバリネット、ビリダベン、DDVP、アセタミプリド剤等による防除
	ハダニ類	並	やや多	・9月下旬に急増し、期間を通して平年よりやや多い発生であった。	・9月～10月上旬、12月中旬～1月中旬の高温。	・ビフェナゼート、エトキサゾール、ミルベメクチン、テフフェンバド剤等による防除 ・天敵による防除
	ハスモンヨトウ	並	並	・9月下旬から発生し、平年並の発生であった。		・IGR剤、エマクチン安息香酸塩、スピノサド、ビリダリル剤等による防除
イチゴ(育苗圃) (08年植付)	炭疽病	並	並	・ <i>Glomerella cingulata</i> による炭疽病は5月上旬に一部で発生し、6月下旬から増加し平年並の発生であった。		・発病株の除去 ・高設育苗 ・全面マルチ被覆 ・雨よけ育苗 ・点滴灌水 ・北海道での親株用苗の育苗 ・親株床の土壌消毒 ・プロベネ、ジチアノ、有機銅、マンゼブ、フルジオキニル等による防除
	萎黄病	並	並	・平年並みの発生であった。		・発病株の除去 ・土壌消毒
	うどんこ病	並	やや少	・5月下旬から発生し、やや少ない発生であった。		・古葉の除去 ・被害葉の除去 ・EBI剤、炭酸水素カリウム、ホリオキシ、メバコリウム、マシン油剤等による防除
	輪斑病	並	やや多	・5月下旬から7月下旬にかけて増加し、期間を通してやや多い発生であった。	・施肥の少量化。 ・本病に対する感受性が高い品種の普及。	・ピテルタノール剤による防除 ・被害葉の除去
	アブラムシ類	並	並	・5月上旬には平年よりやや多い発生であったが、5月下旬以降平年並の発生であった。		・ビリダベン、アセタミプリド剤等による防除
	ハダニ類	並	やや多	・5月上旬から発生し、7月上旬から8月中旬に増加し、やや多い発生であった。	・7月～8月の少雨	・ビフェナゼート、エトキサゾール、ミルベメクチン、クロルフェニル剤等による防除
	ハスモンヨトウ	並	やや多	・7月～9月に発生し平年よりやや多い発生であった。		・IGR、BT、エマクチン安息香酸塩、スピノサド、ビリダリル剤等による防除 ・フェロモントラップによる発生予測
かんきつ	そうか病	葉: やや遅 果実: やや遅	葉: 並 果実: 並	・春葉における初発生は5月下旬と平年より遅く、発生量は平年並に推移した。 ・果実における初発生は6月下旬と平年より遅く、発生は平年並に推移した。		・イミベンコナゾール剤、ジチアノ剤等による発芽期の防除 ・フルジナム剤、クレソキシメチル剤による灰色かび病との同時防除
	かいよう病	葉: 並 果実: やや遅	葉: 並 果実: 並	・春葉における初発生は5月下旬と平年並だった。発生量は平年並で推移した。 ・果実における初発生は7月上旬と平年よりやや遅く、発生量は平年並に推移した。		・銅剤による防除 ・発病枝葉の除去 ・防風対策の強化 ・ミカンハモグリガの防除(ネオニコチノイド系、カルメート系薬剤)
	黒点病	やや遅	やや少	・初発生は7月上旬と平年よりやや遅く、発生量は平年よりやや少なく推移した。	・防除の徹底 ・7月以降の少雨	・マンゼブ剤、マンネブ剤による防除

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
かんきつ	ミカンハダニ	並	並	・5月、6月に降水量が多かったため、春先の増加が鈍かった。7月以降発生が増加したため、8月をピークとする一山型の発生となった。	・5月、6月の降雨 ・7月以降の少雨	・冬季及び夏季のマシ油乳剤による防除 ・8月下旬～9月のイトキサザール剤、スピロクロフェン剤、ビフェノート剤等による防除
	ミカンサビダニ	並	少	・巡回調査ではミカンサビダニによる被害の発生を確認できなかった。	・防除の徹底	・ピリダベン剤、酸化フェンタス剤による防除・イトキサザール剤、PAP剤によるカイガラムシ類との同時防除・スピロクロフェン剤、ビフェノート剤によるミカンハダニとの同時防除
	チャノキイロアザミウマ	並	並	・諫早市のトラップ誘殺量は6月の降水量が多かったため、7月上旬の第3世代の発生が少なかった。7月上旬に梅雨明けし、降水量が少なかったため7月下旬から8月上旬にかけて第4、第5世代の発生量が多かった。9月以降の発生量は平年並であった。 ・果梗部の被害果率はほぼ平年並であった。果頂部の被害果率は7月以降平年よりやや多かった。	・5月、6月の降雨 ・7月以降の少雨	・ネオニコチノイド系剤、アセフェート剤、マンゼブ剤、合成ピレスロイド系剤による防除 ・光反射シートによる防除
	カメムシ類	7月以前：少 8月以降：やや多	7月以前：少 8月以降：やや多	・チャバネアオカメムシの越冬量は平年より少なく、7月まではかんきつ園での被害はほとんど見られなかった。 ・8月下旬以降、かんきつ園へのカメムシの飛来が増加し、一部の圃場では被害が発生した。	・越冬量が少なかった。 ・ヒノキきゅう果の結実量が平年より多かった。	・合成ピレスロイド系剤、ネオニコチノイド系剤による防除
	マルカイガラムシ類	並	やや少	・8月下旬に果実での初発を確認した。その後の発生は平年よりやや少く推移した。	・防除の徹底	・冬季及び夏季のマシ油乳剤による防除 ・6月上旬～下旬のPAP剤、DMPT剤等による防除
びわ	がんしゅ病	並	やや少	・平年並の4月上旬に春枝における発生を認め、その後の発生は平年よりやや少く推移した。	・7月以降の少雨	・芽かき、剪定後の銅水和剤による防除
	灰斑病	並	やや少	・平年並の5月上旬に春葉における発生を認めた。8月以降の発病葉率は平年よりやや少く推移した。 ・収穫時に降雨が続き、灰斑病菌、炭疽病菌による果実腐敗がやや増加した。	・6月の多雨 ・7月以降の少雨	・春葉及び夏葉伸長後の銅・カスガマイシン剤による防除 ・開花期のミナクザンアルベシル酸塩剤による防除
	ナシヒメシクイ	並	やや多	・フェロントラップ（諫早市）における誘殺量はやや多かった。		・カルタップ剤による防除
	カメムシ類	-	-	・ほとんど発生はなかった。	・越冬量が少なかった。	・袋かけの実施
なし	黒星病	遅	やや多	・葉では平年よりも遅い5月下旬に発生を確認した。その後の発生は発病葉率は平年並に推移したが、発生圃場率が高く、果実での発病は7月以降増加した。	・5月、6月の降雨	・E B I剤等による防除
	赤星病	並	少	・初発は4月下旬で平年並であった。その後の発生は平年より少く推移した。	・防除の徹底	・黒星病との同時防除
	うどんこ病	並	少	・初発は7月上旬で平年並であった。その後の発生は平年より少く推移した。	・防除の徹底	・黒星病との同時防除
	ナシヒメシクイ	やや遅	やや多	・フェロントラップ（諫早市）における誘殺量は平年よりやや多かった。		・合成ピレスロイド系剤、有機リン系剤による防除
	ハダニ類	遅	やや少	・初発は7月上旬で平年より遅かった。その後の発生は平年より少く推移した。	・防除の徹底	・ミルベメクチン剤、イトキサザール剤等による防除
	カメムシ類	7月以前：少 8月以降：やや多	7月以前：少 8月以降：やや多	・チャバネアオカメムシの越冬量は平年より少なく、7月まではかんきつ園での被害はほとんど見られなかった。 ・8月下旬以降、カメムシの飛来が増加し、一部の圃場では被害が発生した。	・越冬量が少なかった。 ・ヒノキきゅう果の結実量が平年より多かった。	・合成ピレスロイド系剤、有機リン系剤等による防除

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
なし	アブラムシ類	並	やや多	4月上旬に発生を確認した。 4月下旬以降平年よりやや多く推移したが、6月下旬以降は平年並の発生となった。	3月の高温	・有機リン系剤、カーバメイト系剤、ネオニコチノイド系剤等による防除
ぶどう	黒とう病	やや遅	やや多	・葉における初発生は4月下旬と平年よりやや遅かった。 ・発病葉率は5月から6月にかけて平年より高かったが7月以降平年並となった。発生圃場率は平年よりも高かった。	5月、6月の降雨	・メキシアクリレート剤、ジチアノ剤、マンゼブ剤等による防除
	べと病	並	多	・葉における初発生は5月下旬と平年並であった。 ・梅雨明け後の7月上旬から発生が急激に増加し、9月下旬まで発生が多い状態が続いた。	5月、6月の降雨	・メキシアクリレート剤、マンゼブ剤、ホセチル剤、酸アミド系剤等による防除
	うどんこ病	やや早	並	・葉における初発生は6月下旬と平年よりやや早かった。7月以降の発生量は平年並であった。		・メキシアクリレート剤、EBI剤等による防除
	チャノキイロアザミウマ	並	やや多	・諫早市のトラップ誘殺量は6月の降水量が多かったため、7月上旬の第3世代の発生が少なかった。 7月上旬に梅雨明けし、降水量が少なかったため7月下旬から8月上旬にかけて第4、第5世代の発生量が多かった。9月以降の発生量は平年並であった。	・5月、6月の降雨 ・7月以降の少雨	・ネオニコチノイド系剤、合成ピレスロイド系剤、有機リン系剤等による防除 ・袋かけの実施
茶	炭疽病	遅	並	・巡回調査による初確認は6月下旬と平年より遅かった。 ・7月以降の発生量は平年より少なく推移したが、9月以降一部の圃場で発生が増加した。	・防除の徹底 ・秋芽萌芽期～生育期の降雨	・EBI剤等による防除
	チャノコカクモンハマキ	並	並	・巡回調査による初確認は4月下旬と平年並であった。 ・8月から9月にかけて巻葉数の増加が見られた。	・7月以降の少雨	・イマメチン安息香酸剤、有機リン系剤、IGR剤による防除
	チャノホソガ	やや遅	並	・巡回調査による初確認は5月下旬と平年よりやや遅かった。 ・8月から9月にかけて巻葉数の増加が見られた。	・7月以降の少雨	・チャノコカクモンハマキとの同時防除
	チャノミドリヒメヨコバイ	並	多	・巡回調査による初確認は4月下旬と平年並であった。 ・5月以降発生の多い状態が続いた。	・7月以降の少雨	・ネオニコチノイド系剤等による防除
	チャノキイロアザミウマ	並	やや多	・発生量は平年よりやや多い状態で推移した。	・7月以降の少雨	・ネオニコチノイド系剤等による防除
	カンザワハダニ	並	少	・発生量は平年より少なく推移した。	・防除の徹底	・クロルフェニル剤、ミルベクチン剤、クワフェンシオン剤等による防除
	クワシロカイガラムシ	並	少	・発生量は平年よりやや少なかった。	・防除の徹底 ・第1世代生育期にあたる6月の降水量が多かった。	・有機リン系剤、IGR剤等による防除